専門演習　　伊藤 栄晃

授業概要

今年度のテーマは、18・19 世紀の英領西インド諸島のプランテーション奴隷制の歴史ならびに奴隷の人口の問題です。このテーマは、ここ３０年来西洋の歴史研究の世界で最も注目されているものの一つです。それは、アフリカ人奴隷制とレイシズム、そしてその根底にある性差別という、欧米では今日非常にデリケートな問題に正面からチャレンジする学際的試みだからです。まず予備知識の拡充に努めてもらい、この分野の古典的文献を輪読し様々議論し合います。そして奴隷の生死に関する史料を吟味し、各自の問題点を掘り下げてゆきます。原史料から歴史を探る楽しみとともに、人類の歩みの厳粛さを感じてもらうことが目標です。

授業計画

第 1 回	春期概要説明：テキスト講読の目的・狙い	第 16 回	春期成果の確認　秋期授業概要説明
第 2 回	準備的考察①：歴史人口学と家族史研究	第 17 回	『コロンブスからカストロまで』Ⅱ内容概略紹介
第 3 回	準備的考察②：「新大陸」とヨーロッパ	第 18 回	『コロンブスからカストロまで』Ⅱを読む①
第 4 回	準備的考察③：大西洋奴隷貿易と西インド	第 19 回	『コロンブスからカストロまで』Ⅱを読む②
第 5 回	準備的考察④：「ウィリアムズ・テーゼ」	第 20 回	『コロンブスからカストロまで』Ⅱを読む③
第 6 回	まとめ：黒人奴隷の人口と家族	第 21 回	『コロンブスからカストロまで』Ⅱを読む④
第 7 回	『コロンブスからカストロまで』Ⅰを読む①	第 22 回	『コロンブスからカストロまで』Ⅱを読む⑤
第 8 回	『コロンブスからカストロまで』Ⅰを読む②	第 23 回	『コロンブスからカストロまで』Ⅱを読む⑥
第 9 回	『コロンブスからカストロまで』Ⅰを読む③	第 24 回	『コロンブスからカストロまで』Ⅱを読む⑦
第 10 回	『コロンブスからカストロまで』Ⅰを読む④	第 25 回	『コロンブスからカストロまで』Ⅱを読む⑧
第 11 回	『コロンブスからカストロまで』Ⅰを読む⑤	第 26 回	『コロンブスからカストロまで』総括的討論
第 12 回	『コロンブスからカストロまで』Ⅰを読む⑥	第 27 回	原史料吟味①：ジャマイカ Slave Register 読解と感想
第 13 回	『コロンブスからカストロまで』Ⅰを読む⑦	第 28 回	原史料吟味②：ジャマイカ Slave Register 読解と感想
第 14 回	『コロンブスからカストロまで』Ⅰを読む⑧	第 29 回	原史料吟味③：ジャマイカ Slave Register 読解と感想
第 15 回	春期成果のまとめと秋期準備：各自研究テーマの開示と課題小論文の指定	第 30 回	今年度演習の総括　成果と課題について
		第 31 回	

到達目標

- 4 年次卒業論文執筆準備として調査、データの作成と整理、文献批判・論文構想・小論文作成のためのスキル養成をします
- 海外の時代も文化的背景も全く異なる人類同胞の経験を読み解き、地球的視野を獲得します
- プレゼンテーション能力を高め、実社会で職業人として活躍できる資質を養います
- 自分と異なる意見を尊重しながら、自分の意見をより良く鍛える力を獲得します

履修上の注意

- 「西洋史入門」や「西洋史概説」、「西洋史資料講読」の受講を推奨します。ただし意欲さえあればこれらを受講していない諸君の参加も歓迎します。その際には、必要知識を個別に指導しますので、遠慮なく申し出てください
- やむを得ない欠席や遅刻、早退は、事前に指導教員だけでなくメンバー皆に通知し、了解を取らなければいけません

予習・復習

演習は、全員が力を合わせ、心を一つにして初めて成り立つ授業です。そのためにはプレゼンター（1 名指定）だけでなく、司会（1 名指定）、コメンテーター（1～2 名指定）その他のメンバーも、事前に時間を十分にかけ、入念に準備して臨むことが必要です。春期ではテキストを十分に読み込んで参加してください。秋期には、プレゼンターは報告 1 週間前までにレジュメ（発表骨子）を作成、指導を受けた上で皆に提示します。司会、コメンテーターその他のメンバーは、プレゼンターのために建設的な批判ができるよう、準備してください。

評価方法

- レジュメ並びに小論文の内容の的確さと発表者の論点の独自性、プレゼンテーションやコメントの姿勢の真摯さ、そして演習という共同作業にどれほど貢献できたかを、各回審査し、総合的に評価します。

テキスト

- 教科書名：『コロンブスからカストロまで――カリブ海域史、1492－1969――』Ⅰ・Ⅱ巻
- 著 者 名：E.ウィリアムズ著　川北稔訳
- 出版社名：岩波書店
- 出 版 年（ISBN）：2000 年

専門演習　　掛野 剛史

授業概要

明治から現代まで日本語で書かれた言語による表現を対象に卒業論文を書きたい人のための演習です。基本的には日本の近代小説を扱います。

さまざまな文章を大量に読み、調べ、考え、それによって、「感想」ではない「論」を作り上げることができるようにします。また発表者としては、自らの考えを分かりやすく人に伝えることができるように努め、聞き手としては人の発表をどのように聞き、どのような意見や質問を出せば良いかを考えます。互いに主体的に参加し、生産的な意見交換が出来るよう指導します。

またグループワークを行い、調査の方法や、資料の使い方なども学び、卒業論文に備えます。

調査考察の成果として小冊子を作成したいと思います。

授業計画

学外での実習を行う可能性がある。

第 1 回	ガイダンス・授業内容確認	第 16 回	前期レポートの講評
第 2 回	資料調査の方法について	第 17 回	前期レポートの相互批評①
第 3 回	発表の方法について	第 18 回	前期レポートの相互批評②
第 4 回	受講者による発表①	第 19 回	受講者による発表①
第 5 回	受講者による発表②	第 20 回	受講者による発表②
第 6 回	受講者による発表③	第 21 回	受講者による発表③
第 7 回	発表についての補足①	第 22 回	発表についての補足①
第 8 回	発表についての補足②	第 23 回	発表についての補足②
第 9 回	受講者による発表④	第 24 回	受講者による発表④
第 10 回	受講者による発表⑤	第 25 回	受講者による発表⑤
第 11 回	受講者による発表⑥	第 26 回	受講者による発表⑥
第 12 回	発表についての補足③	第 27 回	発表についての補足③
第 13 回	発表についての補足④	第 28 回	発表についての補足④
第 14 回	前期の振り返り	第 29 回	後期の振り返り
第 15 回	レポート作成について	第 30 回	レポート作成について
		第 31 回	卒論発表会への参加

到達目標

①日本の言語表現について自分なりの視点を持ち、それを言語化して考察することができるようになる。
②他者との討議によって、互いの立場を理解しながらお互いの考察を深め合うことができるようになる。
③大学において日本近代文学を専攻したと、自信をもって言えるようになる。

履修上の注意

遅刻欠席をしないこと。

作品を読んでくることは当然として、主体的、積極的な態度で臨むこと。

発言を求められたら、必ず発言すること。

学外での授業を行う可能性がある。

その他のルールは授業内で示す。

予習復習

【予習】決められた作品を読み、意見を考えておくこと。
【復習】授業を踏まえ、作品を読み直すこと。

評価方法

発表・レポート・授業への参加態度をあわせて総合的に評価する。

テキスト

・教科書名：日本近代短篇小説選　昭和篇２
・出版社名：岩波文庫
・ＩＳＢＮ　：978-4003119150

専門演習　　熊田 和典

授業概要

今や国際語である英語の歴史は波乱万丈ともいってもよいだろう。そもそも英語はイギリス人の祖先である北ドイツの小部族、アングロサクソン人の言葉であった。そのゲルマン人の言葉は、1066 年にフランスの一地方の領主がイギリスを武力制圧した大事件など数々の外圧の影響を受けて、徐々に現在の形に変化していった。その歴史的過程を見ていくのは非常に興味深いことである。

英語を学習していると、様々な疑問が浮かぶことがある。英単語の綴り字はなぜ発音通り書かれず不規則で、ひとつひとつ暗記する必要があるのだろうか。複数形は単数形に s をつける（例えば books）はずなのに、なぜ child の複数形は children なのだろうか。このような疑問は英語を歴史的に考察すれば自ずと解けていく。

この演習では、英語を過去から歴史的に分析し、現在の英語をさらに深く理解するとともに、英語学のものの見方を身につけていく。

授業計画

第 1 回	イントロダクション	第 16 回	ノルマン・コンクエスト
第 2 回	古英語から近代英語まで(1)	第 17 回	中英語の主な特徴(1)
第 3 回	古英語から近代英語まで(2)	第 18 回	中英語の主な特徴(2)
第 4 回	ケルト人、ローマ人の英国侵略	第 19 回	中英語の主な特徴(3)
第 5 回	ケルト語、ラテン語の影響(1)	第 20 回	近代英語期：標準語の成立
第 6 回	ケルト語、ラテン語の影響(2)	第 21 回	近代英語期：大母音推移
第 7 回	アングロサクソン人の英国侵略	第 22 回	ルネサンスが与えた英語への影響
第 8 回	アングロサクソン人の文化	第 23 回	宗教改革が与えた英語への影響
第 9 回	古英語の主な特徴(1)	第 24 回	シェイクスピアの英語の特徴
第 10 回	古英語の主な特徴(2)	第 25 回	綴り字問題
第 11 回	古英語の主な特徴(3)	第 26 回	規範文法の成立
第 12 回	ヴァイキングの英国侵略	第 27 回	アメリカ英語
第 13 回	北欧語の英語への影響(1)	第 28 回	英語の辞書
第 14 回	北欧語の英語への影響(2)	第 29 回	語源
第 15 回	春期の総まとめ	第 30 回	総まとめ

到達目標

古英語、中英語、近代英語それぞれの特徴を把握して英語の歴史を理解するとともに、英語学の基礎を学び、卒業論文を書くための土台となる力を身につけることを到達目標とする。

履修上の注意

この演習は英語の「歴史」を扱うため、英語が苦手な方でも、英語の歴史に興味がある方ならば受講を歓迎する。テキスト、プリント等はほとんど日本語で書かれたものを使用する。専門科目の「英語史」の講義を受講する必要はない。

予習・復習

毎回テキストを読んで理解できた箇所とできなかった箇所を明確にして授業に臨み、その後、予習において理解できなかった箇所を中心に復習することが望ましい。

評価方法

授業内での発表（春期・秋期各一回）、レポート（春期・秋期各一回）を重視し、さらに学習に対する姿勢も考慮に入れて、総合的に評価する。

テキスト

- 教科書名：『英語の歴史』（スタンダード英語講座 3）
- 著 者 名：渡部昇一
- 出版社名：大修館書店
- 出 版 年：1983 年

専門演習　　現影 秀昭

授業概要

英語で John began the book. He began the second beer.とは言えますが、John began the dictionary.や John began the rock.は変です。これらの例は「本を読み始める」「本を執筆し始める」「飲み始める」など begin が場面に応じて複数の意味を帯びます(多義性)。私達は頭の中の辞書に begin の意味をどんどん無限に増やしていくのでしょうか(同音異義語の様に)？しかし複数の意味の間には論理的関係があります。例えば「作家が書く」「読み物」等、本のいろいろな面と、begin の活動開始という事象と結ぶ関係です(cf. Pustejovsky 1995)。このような英語の論理的な多義の例(や転換動詞や文未満の断片)を検討して、言葉の面から人間の思考・認知の解明をします。基本から派生へ動的な展開の法則があるかもしれません。

授業計画

第 1 回	Introduction	第 16 回	Lexical Decomposition and Type(1)
第 2 回	Conversion in English (1)	第 17 回	Lexical Decomposition and Type(2)
第 3 回	Conversion in English (2)	第 18 回	Lexical Decomposition and Type(3)
第 4 回	Conversion in English (3)	第 19 回	Lexical Decomposition and Type(4)
第 5 回	Conversion in English (4)	第 20 回	Lexical Decomposition and Type(5)
第 6 回	Conversion in English (5)	第 21 回	Events in Linguistic Theory (1)
第 7 回	Incorporation (1)	第 22 回	Events in Linguistic Theory (2)
第 8 回	Incorporation (2)	第 23 回	Events in Linguistic Theory (3)
第 9 回	Incorporation (3)	第 24 回	Events in Linguistic Theory (4)
第 10 回	Incorporation (4)	第 25 回	Events in Linguistic Theory (5)
第 11 回	Incorporation (5)	第 26 回	The Significance of Fragments (1)
第 12 回	Logical Polysemy (1)	第 27 回	The Significance of Fragments (2)
第 13 回	Logical Polysemy (2)	第 28 回	The Significance of Fragments (3)
第 14 回	Logical Polysemy (3)	第 29 回	The Significance of Fragments (4)
第 15 回	Logical Polysemy (4)	第 30 回	筆記試験

到達目標

論文や文献を読み、概要を作り、そこで取り上げられている問題について議論する。他の論文で同じ問題を取り上げながら、異なる答を主張しているものはないかにも注意する。疑問点を出発点として、同じ現象を取り上げて、再分析を行い、新たな答を見つける。

履修上の注意

積み重ねが大事ですから、休まないようにしてください。またノートを毎回きちんとってください。わからないことがあったら、どんどん質問して疑問を解消してください。

予習・復習

できれば分担表を作って、一緒に論文を読んでゆきたいと思います。背景知識となることを辞典、事典などであらかじめ調査してもらったり、現象について内省、コーパス調査、(思考)実験などをすることになると思います。毎回、配布された資料や、自分でとったノートを見て復習をし、知識の整理をしておいてください。

評価方法

出席点、ゼミへの参加度、提出物、筆記試験などを総合的にみて評価する。

テキスト

印刷教材を使用します。参考文献は適宜紹介します。とりあえず、次の文献を挙げておきます。

梶田優(1976)『変形文法理論の軌跡』大修館書店, Pustejovsky et al. (2013) *Advances in Generative Lexicon*. Springer. Clark and Clark (1979) "When Nouns Surfaces as verbs," *Language* 55.

専門演習　　西山 智則

授業概要

カルチュラル・スタディーズ　映像社会と現代文化の解読

映像イメージを読み解き、文化現象の意味を考察してゆく。映画、ドキュメンタリー、小説、あるいは漫画や雑誌などに描かれる現在の諸問題を考察することで、現代文化の理解を目標とする。カウンセリングブーム、うつ病の流行、携帯電話、携帯小説、性同一性障害、児童虐待、モンスター、怪獣、ホラー映画、少年犯罪、多重人格、身体障害、テロリズム、ファッション、ディズニーランド、アニメーション、オタクなど、現代社会を表象するテーマを、映画等の映像テクストを分析することで、議論してゆきたい。

授業計画

第 1 回	自己紹介　ゼミの方針	第 16 回	ジブリ映画論（1）
第 2 回	カルチュラル・スタディーズとは	第 17 回	ジブリ映画論（2）
第 3 回	『天気の子』と現代日本	第 18 回	『エヴァンゲリオン』と苦悩の若者たち
第 4 回	『鬼滅の刃』とヒットの要因	第 19 回	新海誠論―アニメ文化のゆくえ
第 5 回	クトゥルフ神話の文化史	第 20 回	日本の古典的怪談文化
第 6 回	H・P・ラヴクラフト論	第 21 回	『リング』とＪホラーの文化論
第 7 回	文学・映画における恐竜	第 22 回	日本における古典的妖怪文化
第 8 回	キングコングと猿の文化史	第 23 回	『妖怪ウォッチ』と現代日本
第 9 回	映画における原子力発電所	第 24 回	同性愛映画の文化論
第 10 回	原爆映画史――放射能の怪物たち	第 25 回	オタク文化の進化論
第 11 回	レポート発表会	第 26 回	ライトノベル文化論
第 12 回	ゴジラシリーズと昭和/平成の時代文化	第 27 回	『ジョーカー』とアメコミの変貌
第 13 回	『シン・ゴジラ』とゴジラの変貌	第 28 回	同時多発テロの映画的側面
第 14 回	怪獣文化のゆくえ―『ポケモン』文化論	第 29 回	テロリズム時代の恐怖文化
第 15 回	日本アニメの歴史	第 30 回	スティーヴン・キング『ＩＴ』論

到達目標

映像イメージを読み解き、文化現象の意味を考察してゆく。現代思想を把握することで、映画、ドキュメンタリー、小説、あるいは漫画や雑誌などに描かれる諸問題を考察し、現代文化の理解を目標とする。

履修上の注意

マナーを尊重して楽しい授業にするために、積極的な参加を望みたい。映画の好きな学生は特に歓迎したい。時にセンセーショナルな映像を見ることがあるので、苦手な学生は注意してほしい。大量の資料を配布するのでファイルを持参。

予習・復習

配布した資料は授業後に再び読み直してほしい。

評価方法

学期末レポート（６０%）、提出物およびコメントペーパー（４０%）などの総合評価。

テキスト

プリントなどの配布資料　また参考文献ついては随時指定する。

専門演習　　布村 育子

授業概要

教育を多面的に捉えることを目的にする演習です。

最初の 15 分間は、教員採用試験問題を研究する時間です。採用試験の問題が、何を根拠にして、どう出題されているのかを研究します。

その時間のあとには、教育学や教育社会学を援用しながら教育問題を考察します。例えばこれまでは、学力低下、虐待、いじめ、不登校、親の教育力、校則、部活動、生徒指導、個性化教育、教育費、教員の事件、教員と生徒の恋愛といったトピックスを紹介し、その問題について考察しました。

学生同士のディベートを行う場合には、採用試験の集団討論や集団面接等の対策を想定して行います。

秋期には、春期で蓄積した知識と技能を活用し、卒論の「草稿」を仕上げます。そのため各回では、ゼミ生が卒論構想及び作成経過等を報告し議論をします。

授業計画

第 1 回	春期演習の運営上の説明	第 16 回	秋期演習の運営上の説明
第 2 回	歴史から教育を考察する方法	第 17 回	新学習指導要領の考察（授業はどうなるのか）
第 3 回	1950 年代の教育	第 18 回	新学習指導要領の考察（教員はどうなるのか）
第 4 回	1960 年代の教育	第 19 回	新学習指導要領の考察（生徒はどうなるのか）
第 5 回	1970 年代の教育	第 20 回	新学習指導要領の考察（学校はどうなるのか）
第 6 回	1980 年代の教育	第 21 回	卒業論文の書き方
第 7 回	1990 年代以降の教育	第 22 回	卒業論文に向けた各ゼミ生の発表
第 8 回	戦前の教育問題の捉え方	第 23 回	卒業論文に向けた各ゼミ生の発表
第 9 回	現代の教育問題を考察する方法	第 24 回	卒業論文に向けた各ゼミ生の発表
第 10 回	教師に関する教育問題	第 25 回	卒業論文に向けた各ゼミ生の発表
第 11 回	生徒に関する教育問題	第 26 回	卒業論文に向けた各ゼミ生の発表
第 12 回	教育改革に関する教育問題	第 27 回	卒業論文に向けた各ゼミ生の発表
第 13 回	教員組織に関する教育問題	第 28 回	各ゼミ生の発表の総括
第 14 回	教育問題の語られ方を相対化する	第 29 回	今後の教育に関する議論
第 15 回	前期のまとめ	第 30 回	秋期のまとめ

到達目標

教育は、理想論として語られることが多いのですが、教員になる人には、是非「事実は、どうなっているのか？」という視点をもってほしいと思っています。そのような視点を身に付ける為のゼミだと考えてください。先生と生徒、という 2 者関係だけで物事を考えるのではなく、社会制度まで含めた広い視野で物事を考えられることを目指しています。

履修上の注意

教職課程を履修している学生が対象です。途中で教職を諦めた場合、ゼミスケジュールや内容についていけない事態が生じると思います。進路をしっかり自覚してから履修してください。

予習・復習

予習：こちらが指示する教育問題について、あらかじめ予備知識を得て置く。
復習：ゼミで扱ったトピックスについて書かれてある文献を自ら探して読む。

評価方法

受講態度 60%　春期と秋期の最後に提出するレポート 40%

ただし、1 月末に卒業論文の「草稿」が提出されない場合には、「不可」とします。

テキスト

ゼミの中で指示します。

専門演習　　福島 良一

授業概要

本演習は、主として日本の近現代史（幕末・明治維新期～現代）の分野から卒業論文のテーマを設定しようとしている学生を対象とする。夏休みに入るまでに、おおよその卒論テーマを決めてもらうことになる。

春期の授業では、論文の書き方や文献・史料の集め方などの説明を行うとともに、指定したテキスト（山内昌之・細谷雄一編『日本近現代史講義』）を使って発表と質疑応答を行いながら内容を検討していく。

秋期の授業では、テキストの講読と併行して、各人が設定したテーマについての研究報告（先行研究や文献・史料の紹介、問題の設定など）を行う。受講生全員とのディスカッションを通じて、論文の中身を練ることに努める。

４年次における卒論作成に向けて、日本近現代史の知識を養いつつ、論文作成法を身につけられるようキメ細かく指導する。

授業計画

第１回	春期の進め方の説明	第 16 回	秋期の進め方の説明
第２回	論文の準備・作成方法について	第 17 回	卒論構想についての１回目研究報告①
第３回	文献・史料の収集について	第 18 回	卒論構想についての１回目研究報告②
第４回	『日本近現代史講義』の講読①	第 19 回	卒論構想についての１回目研究報告③
第５回	『日本近現代史講義』の講読②	第 20 回	卒論構想についての１回目研究報告④
第６回	『日本近現代史講義』の講読③	第 21 回	卒論構想についての１回目研究報告⑤
第７回	『日本近現代史講義』の講読④	第 22 回	『日本近現代史講義』の講読⑪
第８回	『日本近現代史講義』の講読⑤	第 23 回	『日本近現代史講義』の講読⑫
第９回	『日本近現代史講義』の講読⑥	第 24 回	『日本近現代史講義』の講読⑬
第 10 回	『日本近現代史講義』の講読⑦	第 25 回	卒論構想についての２回目研究報告①
第 11 回	『日本近現代史講義』の講読⑧	第 26 回	卒論構想についての２回目研究報告②
第 12 回	『日本近現代史講義』の講読⑨	第 27 回	卒論構想についての２回目研究報告③
第 13 回	『日本近現代史講義』の講読⑩	第 28 回	卒論構想についての２回目研究報告④
第 14 回	各自の設定テーマの報告	第 29 回	卒論構想についての２回目研究報告⑤
第 15 回	春期の総括	第 30 回	秋期の総括

到達目標

① できるだけ早めに卒論で書こうとするテーマをしぼっていく。
② テーマに関連する文献や史料を収集できるようにする。
③ 文献・史料を読み、内容を理解できるようにする。

履修上の注意

① 日本史、特に近現代史に興味を持ち、その分野から卒論のテーマを設定する予定の者が受講することを期待する。
② 演習は学生主体で行われるものなので、全出席することが前提である。無断欠席は認めない。

予習・復習

① テキストは毎回必ず各自事前に目を通しておく。
② 自分の発表に際しては、レジュメを作成する。

評価方法

授業に対する姿勢（発表準備や質疑応答への参加）80%、レポート 20%

テキスト

・教科書名：日本近現代史講義
・著 者 名：山内昌之・細谷雄一編
・出版社名：中公新書
・出 版 年（ISBN）：2019 年

専門演習　　湯浅 吉美

授業概要

日本史や日本文化に関連するテーマで卒業論文を書きたいと思っている諸君を対象に，そのための基礎力を身に付けることを目指す。卒業論文を書くには，題材を見つけ，研究の流れを追い，参考文献を読み，史料を調べ，途中経過を報告し，ふさわしい文体・ことばで書くなど，さまざまなテクニックが必要だが，それらについて指導する。最近まことに好適な本が出たので，それを輪読する形で進めてゆく。

授業計画

第１回	ガイダンス（授業の進め方など）	第 16 回	第７章　章立てを考える①
第２回	第１章　卒業論文の前に	第 17 回	第７章　章立てを考える②
第３回	第２章　卒業論文の題目を考える①	第 18 回	第８章　文章を書く①
第４回	第２章　卒業論文の題目を考える②	第 19 回	第８章　文章を書く②
第５回	第３章　論文の集め方と読み方①	第 20 回	第９章　注をつける①
第６回	第３章　論文の集め方と読み方②	第 21 回	第９章　注をつける②
第７回	第３章　論文の集め方と読み方③	第 22 回	第 10 章　「はじめに」を書く①
第８回	第４章　史料があってこそ①	第 23 回	第 10 章　「はじめに」を書く②
第９回	第４章　史料があってこそ②	第 24 回	第 11 章　「おわりに」を書く①
第 10 回	第６章　史料を読む①	第 25 回	第 11 章　「おわりに」を書く②
第 11 回	第６章　史料を読む②	第 26 回	第 12 章　下書きが書けたら
第 12 回	第６章　史料を読む③	第 27 回	第 13 章　提出締切が近づいてきたら
第 13 回	第６章　史料を読む④	第 28 回	全員が１回ずつ口頭発表する①
第 14 回	第５章　夏期休暇の有効活用①	第 29 回	全員が１回ずつ口頭発表する②
第 15 回	第５章　夏期休暇の有効活用②	第 30 回	全員が１回ずつ口頭発表する③

到達目標

自身の力で吉川弘文館版『国史大辞典』の説明を読めるようになること。これは，日本史や日本文化に関するテーマで論文を書こうとする際の，スタートラインにつくことを意味する。

履修上の注意

＊高校日本史程度の基礎知識は，各自の努力によって身に付けておいてもらいたい。
＊なるべく幅広い興味をもち，自力で調べようとする態度を求める。辞書や事典類を引くことを面倒がってはならない。また，積極的に発言するように。
＊遅刻や欠席の扱いについては，初回に諸君と合意したうえで，受講態度として評価に反映する。

予習・復習

【予習】毎回の担当者は，報告を準備しておく。他の諸君も該当部分を読み，疑問点などを考えておく。
【復習】ノートを読み返して，時間中に獲た知識を整理し，関連事項を補充・補足するよう努める。

評価方法

期末ごとに筆記試験を行なって評価する。通年科目だけれども，春期末にも試験を実施することに注意。また演習科目であるから，受講態度を重視する。
配点比率：春期末試験得点 40%，秋期末試験 40%，受講態度 20%

テキスト

・教科書名：歴史学で卒業論文を書くために
・著 者 名：村上紀夫著
・出版社名：創元社
・出 版 年（ISBN）：2019 年
…毎回持参すること。

・参考書：『角川新版日本史辞典』 朝尾直弘ほか編（最新版，角川学芸出版，2007 年）…必須ではないが，手元に持つことを強く奨める。一生モノになるといっても過言ではない。
・その他，必要に応じてプリントを配付する。

専門演習　　穴井 潤

授業概要

この授業は、主に日本古典文学で卒業論文を執筆する学生を対象とし、平安時代の文学史上でもっとも有名な人物の一人である清少納言の作品を扱う。具体的な作品を読みながら、先行研究の調査、口頭発表・論文執筆の方法など、卒業論文作成のために必要な技術を身につけよう。

春学期は『枕草子』の著名な章段を取り上げて輪読するとともに、その章段についての論文を読む。論文を読む際には「何を主張しているか」と同じくらい、「どんな手続きを踏んでいるか」に注意すること。秋学期は『清少納言集』を取り上げて口頭発表してもらう。『枕草子』に描かれている清少納言とは異なる一面を読み取ってほしい。

授業計画

第 1 回	春学期のガイダンス	第 16 回	秋学期のガイダンス
第 2 回	平安文学について	第 17 回	先行研究の調べ方・資料の作り方
第 3 回	摂関期文化と清少納言について	第 18 回	和歌史について
第 4 回	初段「春はあけぼの」を読む	第 19 回	歌集について
第 5 回	論文を読む①	第 20 回	『清少納言集』について
第 6 回	八七段「雪山」を読む	第 21 回	教員による発表見本
第 7 回	論文を読む②	第 22 回	構想の相談と変体仮名について
第 8 回	先行研究の調べ方について	第 23 回	学生発表①
第 9 回	レポートの書き方について	第 24 回	学生発表②
第 10 回	九八段「中納言まゐりたまひて」を読む	第 25 回	学生発表③
第 11 回	論文を読む③	第 26 回	学生発表④
第 12 回	跋文を読む	第 27 回	学生発表⑤
第 13 回	論文を読む④	第 28 回	学生発表⑥
第 14 回	レポートの講評	第 29 回	ディスカッション
第 15 回	春学期のまとめ	第 30 回	秋学期のまとめ
		第 31 回	

到達目標

①清少納言の作品、ひいては王朝文学について理解する。
②論文を読み、その要点を把握する技術を身につける。
③自分の考えをまとめ、他人に向けて発表する技術を身につける。

履修上の注意

基本事項については、授業中に一から説明する予定だが、古典文学についての基礎知識を身につけていることが望ましい。「日本文学史概論（古典）」を履修していると理解しやすい。事情がない限り欠席しない、何らかの事情がある場合は極力事前に報告すること。

予習・復習

『枕草子』各章段や論文については一週間前にプリントを配布するので、事前に目を通すこと。とくに論文については要点をまとめるプリントを配布し、記入してもらう。

ディスカッションを行うので、自分の意見をまとめておく。

評価方法

授業への積極性（20%）、レポート（40%）、発表内容（40%）で判断する。

テキスト

適宜プリントを配布する。

専門演習　　太田 絵梨子

授業概要

本演習では、学校教育に関心のある学生を対象とし、「教えること」や「学ぶこと」に関する実践研究の方法を身に付けることを目指す。教育心理学やその関連領域の理論と、教育実践とを結びつけて研究してみたいという学生の参加を歓迎する。

春期の授業では、教授・学習に関する主要な理論や研究法の理解を深めた上で、実際の実践研究論文を読み解きながら研究の進め方を学ぶ。秋期の授業では、受講生が設定した研究テーマや研究計画について検討し、卒論作成に向けて構想を練り上げていく。

本演習全体を通して、実践研究とは何かに関する理解を深めるとともに、自他の研究を批判的に検討する力を身に付けてもらいたい。

授業計画

第 1 回	春期の進め方の説明	第 16 回	秋期の進め方の説明
第 2 回	教授・学習に関する理論の概観①	第 17 回	発表準備①（良い研究とは？）
第 3 回	教授・学習に関する理論の概観②	第 18 回	発表準備②（発表やコメントの仕方）
第 4 回	研究法についての学習	第 19 回	研究テーマの発表 ・夏休みの間に考えてきた研究テーマについて発表してもらう。 ・発表内容に基づき、より良くするにはどうしたら良いかについて議論する。
第 5 回	実践研究論文の講読 ・教員が指定した文献の中から、各自の関心に基づき発表を担当してもらう。 ・担当者から論文の概要を説明してもらったあと、その内容に基づいて議論を行う。	第 20 回	
第 6 回		第 21 回	
第 7 回		第 22 回	
第 8 回		第 23 回	
第 9 回		第 24 回	発表についてのまとめと補足
第 10 回		第 25 回	研究計画の発表 ・卒論執筆に向けた研究計画の構想について発表してもらう。 ・発表内容に基づき、より良くするにはどうしたら良いかについて議論する。
第 11 回		第 26 回	
第 12 回		第 27 回	
第 13 回		第 28 回	
第 14 回	春期のまとめ① 実践研究とは何か	第 29 回	
第 15 回	春期のまとめ② 研究テーマの決め方	第 30 回	秋期のまとめ

到達目標

- 教授・学習領域における実践研究の方法について理解する。
- 卒論執筆に向けた研究構想を具体化する。
- 自分や他人の研究に対して、批判的に検討できるようになる。

履修上の注意

- 教育心理学を受講していることが望ましい（ただし必須ではない）。
- やむを得ない事情を除き、欠席や遅刻はしないこと。
- 発表担当者だけでなく、受講生全員が毎回の授業で積極的に議論に参加すること。

予習・復習

- 春期の文献講読では、各回で発表される論文を事前に通読してもらう。
- 研究テーマや研究計画を考える上では、授業時間外にも積極的に調べ学習を行う必要がある。

評価方法

授業への参加態度、発表の内容や仕方、議論における発言などを踏まえて総合的に評価する。

テキスト

- 参考書：市川伸一編『教育心理学の実践ベース・アプローチ：実践しつつ研究を創出する』東京大学出版会
- その他、必要に応じて資料を配布する。

専門演習　　岡田 正樹

授業概要

「音楽」を題材として、表現文化が社会／メディア技術といかに結びついているのかを考える。
いくつかトピックを設け、関連する基本文献・重要文献を読み、議論を行う。
トピックによっては、受講学生が文献の内容やそれに対する意見（特に自分の関心テーマに引きつけた意見）をレジュメにまとめ、口頭発表を行うかたちで進める（“発表回”と記載した回に行う予定）。基本的に、発表回の次の回は、教員による補足と解説を行う。
ロック、ヒップホップ、K-POP、アイドル、クラシック音楽等、様々な音楽を題材に、私たちを取り巻く文化の諸相について読み、書き、考える力を習得していくことを目指す。

授業計画

第 1 回	ガイダンス	第 16 回	クラシック音楽とテクノロジー
第 2 回	音楽が好きなことと音楽を研究することの関係	第 17 回	音楽と政治は無関係なのか？①（発表回）
第 3 回	音楽を聴くことと社会、技術の関係	第 18 回	音楽と政治は無関係なのか？②
第 4 回	ロック・ミュージック論①	第 19 回	音楽と政治は無関係なのか？③（発表回）
第 5 回	ロック・ミュージック論②	第 20 回	音楽と政治は無関係なのか？④
第 6 回	アイドルとメディアについて①（発表回）	第 21 回	ライブと録音は何かが違う？①（発表回）
第 7 回	アイドルとメディアについて②	第 22 回	ライブと録音は何かが違う？②
第 8 回	K-POP とは何か①（発表回）	第 23 回	映画／アニメーションと音楽の関係
第 9 回	K-POP とは何か②	第 24 回	レコードの諸問題
第 10 回	モバイルメディアと音楽①（発表回）	第 25 回	古い音楽メディアを考える
第 11 回	モバイルメディアと音楽②	第 26 回	インターネットは音楽を変えたか？
第 12 回	音楽とオリジナリティ①（発表回）	第 27 回	初音ミクがもたらしたものとは？
第 13 回	音楽とオリジナリティ②	第 28 回	楽器と文化
第 14 回	各自の研究テーマ構想の報告	第 29 回	論文の書き方の基礎
第 15 回	研究の進め方、文献の探し方	第 30 回	各自の研究テーマについての報告

到達目標

・音楽と社会・メディアに関する基礎文献、重要文献を読み、要約する力を養う。
・音楽（ないしその他の表現文化）と社会をセットで考える視座を得る。
・さまざまな文献を読み、他の受講生と議論することで、文化の多様なあり方に目を向けることができる。

履修上の注意

・音楽に詳しくなくても、また音楽を卒論のテーマにする予定がなくても、芸術・文化やメディアに関心のある方ならば歓迎する（指定する文献からは、音楽以外の表現文化・メディア文化を考える際にもヒントを得られるはずである）。
・文献講読、発表、ディスカッションの機会がある。積極的な参加を望む。
・全て出席するのが前提だが、やむを得ない欠席については、事前に担当教員に連絡し、了承を得ること。

予習・復習

・文献を指定するので、必ず事前に読んで意見をまとめておくこと。
・発表担当者は、レジュメを作成し、他の受講生に配布できるようにしておくこと。

評価方法

レポート・発表・授業への参加態度をあわせて、総合的に評価。

テキスト

文献はその都度指示する。必要に応じてプリントなどの資料を配布する。

専門演習　　髙山 林太郎

授業概要

本演習では４年次の卒業論文に向けた準備をする。従って、特定の言語資料（新聞か漫画）を見定め、分析し、図書室などで調べ物をすること、それを発表資料にまとめ、口頭発表と質疑応答をすることといった、言語研究の基礎を身につけ、卒業論文の執筆の手掛かりにすることを目標とする。授業の形態としては、最初に講師が分析の仕方などを詳しく示し、それに倣って準備期間を経て各自で発表するというものになる。

言語資料は古代から現代まで様々あるが、本演習では現代の新聞（文章語）および漫画（口頭語など）における書かれた言葉を資料とする。これらは国会図書館にも収められており、学術的に利用できる。

授業計画

第 1 回	授業の進め方の説明と資料の相談	第 16 回	受講生による発表①b
第 2 回	言語資料としての新聞（文章語）①	第 17 回	受講生による発表②b
第 3 回	言語資料としての新聞（文章語）②	第 18 回	受講生による発表③b
第 4 回	言語資料としての漫画（口頭語など）①	第 19 回	発表資料などの改善点の指摘
第 5 回	言語資料としての漫画（口頭語など）②	第 20 回	受講生による発表④b
第 6 回	新聞の文章語と漫画の口頭語の対照①	第 21 回	受講生による発表⑤b
第 7 回	新聞の文章語と漫画の口頭語の対照②	第 22 回	受講生による発表⑥b
第 8 回	受講生による発表①a	第 23 回	発表内容をレポートにする際の注意点
第 9 回	受講生による発表②a	第 24 回	新聞と漫画の言葉の対照方法①
第 10 回	受講生による発表③a	第 25 回	新聞と漫画の言葉の対照方法②
第 11 回	発表資料などの改善点の指摘	第 26 回	新聞と漫画の言葉の対照方法③
第 12 回	受講生による発表④a	第 27 回	新聞と漫画の言葉の対照方法④
第 13 回	受講生による発表⑤a	第 28 回	新聞と漫画の言葉の対照方法⑤
第 14 回	受講生による発表⑥a	第 29 回	新聞と漫画の言葉の対照方法⑥
第 15 回	発表内容をレポートにする際の注意点	第 30 回	新聞と漫画の言葉の対照方法⑦
		第 31 回	定期試験

到達目標

特定の言語資料（新聞か漫画）を見定め、文章語と口頭語を対照しながら、その言語資料の特性を複数見つけ出して論じることができるようになることを目標とする。

履修上の注意

日本語の文法、日本語学（概論）、日本語学（各論）、日本語コミュニケーション、言語学、社会言語学などの科目のうち多くを既に履修しているか、並行して履修してもらいたい。遅刻欠席をしないこと。授業に積極的に参加すること。他人の言語資料にも目を通しておくこと。他人の発表中に質問の内容を考えること。

予習・復習

授業は、各自が発表準備を間に合わせることを前提として計画されており、最初の発表者は７週間の準備期間で仕上げることになる。発表の順番などは原則としてクジで決める。受講者の人数次第では、講義の回数を増やすなどして調整する。各自発表に間に合うように努力されたい。夏休み明けすぐに次の発表があるので準備すること。

評価方法

発表・レポートおよび定期試験（８０パーセント）、その他受講態度等（２０パーセント）で評価する。

テキスト

・教科書は使用しない。資料については以下のとおり。
新聞は「朝日新聞、産経新聞、東京新聞、日本経済新聞、毎日新聞、読売新聞」の６紙などの記事を利用するが、発行日は任意の同じ日（複数日も可）とし、受講者間で発行日が異なるものとする。漫画は特定の作品のフキダシの中のセリフ等を資料とし、単行本全巻を調査する（巻数の少ない作品を選んでよい）。受講者間で作品が（できれば作者も）異なるものとする。